

ガンビア川中流域における農業と共食の慣行

平成 17 年度入学
派遣先国：ガンビア共和国
片山 祐美子

キーワード：ガンビア川中流域，共食，土地保有，マンゴー

対象とする問題の概要

ガンビア共和国の人口密度は 121 人/k m²と他のアフリカ諸国と比較しても非常に高い。高まる人口圧のもとで、いかに食糧の生産性を上げることができるのか。食糧生産が低迷を続けるガンビアにおいて、とくに主食作物であるコメや雑穀類の食糧確保は大きな課題となっている。

1960 年代からコメの二期作を目指して揚水ポンプが川沿いの地域に導入され、1970 年代からは野菜畑や果樹園が広く展開された。また、これらのプロジェクトを評価するための研究が、開発人類学の分野からなされてきた。開発人類学の研究においては、ガンビア人の社会組織や慣習的な制度、つまり消費や農作業といった社会活動にかかわる仕組みが複雑であるために、たとえば既存の「世帯」を独立した経済単位として捉えることの危険性が一様に指摘されてきた。しかし、そうした社会制度や生産、消費形態の複雑さの実相を詳細に記述し、それらと農業との関連について論じた研究はいまだなされていない。

研究目的

本研究では、まず農事暦にそって人びとの活動を記述し、基礎的な農業の実態を明らかにする。その上で、土地の耕作権や収穫物の所有をめぐる制度、食生活に見られる収穫物の共同消費のあり方を検討し、ガンビアの農村社会に見られる複雑な生産と消費の形態を描く。そしてこれらの作業を通して、生産性の低い農業をいかなる社会システムが補っているのかを解明したい。

フィールドワークから得られた知見について

調査はガンビア川中流域に位置する B 村において行なった。B 村は、マンデ系農耕民のマンディンカが大半を占め、雨季に女性による伝統的な低湿地での稲作と男性による乾燥地での雑穀栽培が行なわれている。

耕地はマンディンカ語でマルオとカマニャンの 2 種類に区別され、保有形態や利用の仕方に違いが見られた。マルオは複数の世帯が集まって形成される共食集団に用益権があり、マルオから得られた収穫物は、共食集団全体で消費されなければならない。それに対してカマニャンは一個人が用益権を有し、その収穫物は販売して個人の収入としたり、他人への贈与も可能である。マルオとカマニャンの面積の割合は 2 : 1 と、共食集団で消費される収穫物の割合が高いにもかかわらず、調査村におけるこれら主食作物の自給率は約 30%と低い。主食作物の不足分は、男性が輸入米を購入するなどして補填しなければならない。



女性による稲作



男性による雑穀栽培

この主食作物の不足を補うものとして、次の2つが観察された。

- ① カマニャンから得られた収穫物の一部を共食集団で消費。

不足分の主食作物の補填に責任を負わない女性も、販売すれば個人の収入となりうるカマニャンで収穫した米の一部を共食集団の消費にまわし、共食集団の食糧確保に貢献していた。

- ② ここ数十年の間に導入されたマンゴーが換金作物としてうまく機能。

収穫期とその翌年の収穫期の間にあたる乾季の終わりに収穫期を迎えるマンゴーは、収穫期前の食糧が不足する時期に、輸入米を購入するための現金収入源として重要である。また、同じ共食集団に属する男性たちがどのように輸入米の購入を分担しているのかを調べたところ、その拋出額とマンゴーの所有本数には正の相関が認められた。つまり、マンゴーが食糧確保に寄与し、マンゴーから得られる収入に応じて食糧確保に貢献していることがわかった。



畑とマンゴー林

今後の展開・反省点

今回の調査では、農業を支える社会システムとして制度的な側面に特化して明らかにしたが、今後は、例えばコメが多品種で栽培されているなどの技術的な側面も明らかにしたい。また、調査の過程で農作業に関わるさまざまなサイズの集団が観察されたが、この集団が調査村の農業にどのように関わるのかを明確化することができなかった。これを明らかにすることで、農業に関わる生産・消費システムをより鮮明に描くことができると考える。